

〈研究ノート〉

Theory of Planned Behavior (計画的行動理論) を用いた ビンジ飲酒の影響要因に関する文献レビュー

岡田ゆみ* 下見千恵**

*県立広島大学保健福祉学部 **広島国際大学看護学部

Literature Reviews on Factors Affecting Binge-Drinking Using the Theory of Planned Behavior

Yumi Okada * Chie Shitami **

* Prefectural University of Hiroshima Faculty of Health and Welfare

** Hiroshima International University Faculty of Nursing

〈要旨〉

一機会の多量な飲酒（以下ビンジ飲酒）の対策を検討するため、Theory of Planned Behavior（以下TPB）を用いたビンジ飲酒に関する諸外国の文献レビューを行った。EBISCO host（CINAHL complete, MEDLINE, PsycARTICLES, PsycINFO）を用いて、キーワードに“binge drinking” “the theory of planned behavior”，除外ワードに“adolescent”を設定し、2010～2019年で学術誌に限定した結果、14件（横断研究3件、縦断研究8件、介入研究3件）が対象論文として抽出された。ビンジ飲酒行動に最も強く影響したのはTPBで「行動意図」、TPB以外で「過去のビンジ飲酒」であった。また、ビンジ飲酒行動意図に最も強く影響したのはTPBで「態度」「道徳的規範」、TPB以外で「自己同一性」であった。介入研究では、TPBの構成概念を基盤に「実施意図」や「信念メッセージ」を用いた検証が行われたが、ビンジ飲酒行動に一貫した効果はなかった。介入検証は3件と少なく、対象も大学生に限定されているため、今後、対象層を拡大しながら介入方法の検討が必要と考えられる。

〈Abstract〉

We reviewed international literature on binge drinking, defined as over-drinking alcohol on a single occasion, based on the Theory of Planned Behavior (TPB) to identify binge drinking management measures. We conducted a search using EBSCO host (CINAHL Complete, MEDLINE, PsycARTICLES, PsycINFO) limited to academic journals published between 2010 and 2019. We used “binge drinking” and “the theory of planned behavior” as keywords and “adolescents” as a excluded keyword. We identified 14 papers, including three cross-sectional studies, eight longitudinal studies, and three intervention studies. These papers indicated that “intentions” in TPB and “past binge drinking” other than in TPB affected binge drinking behaviors most strongly. Moreover, “attitudes” and “moral norms” in TPB and “self-identity” other than in TPB affected the intention to binge drink most significantly. Intervention studies adopting “intentions to implement” and “belief messages” based on TPB constructs indicated no consistent effects on binge drinking behaviors. Furthermore, there were only three intervention verification studies, which were limited to university student participants. We suggest examining intervention methods by expanding the participants’ range in the future.

キーワード	
計画的行動理論	theory of planned behavior
ビンジ飲酒	binge drinking
文献レビュー	literature reviews

I. 緒言

本研究では、Theory of Planned Behavior (計画的行動理論, 以下, TPB) を用いたビンジ飲酒に関する文献レビューを行う。ビンジ飲酒とは、定義は未だ一律ではないが、National Institute on Alcohol Abuse and Alcoholism (NIAAA) によると約2時間で純アルコール量(男性で70g, 女性で56g以上)を摂取し、血中アルコール濃度が0.08%以上になることを指す¹⁾。わが国のビンジ飲酒者は、男性32.3%, 女性8.4%でいずれも増加傾向にある²⁾。ビンジ飲酒は、危険飲酒(飲酒者に対する有害な結果をばらむアルコールの消費パターン)³⁾の1つであるが、この危険飲酒の健康被害は消費パターンの特徴で異なる。例えば、酩酊するほどの飲酒では自身や他者をも損なうような外傷や暴力、コントロール不能を含むリスクが急激に出現し、慢性的な大量飲酒では肝障害やある種の癌、精神障害のような長期的な医学リスクを呈する⁴⁾。そのため、各消費パターンで対策を検討する必要がある。

アルコール消費パターンとレベルは、性別、年齢、個人の生物学的・社会経済的脆弱要因、さらには政策環境など、多くの異なる要因によって決定される。また、飲酒行動に許容的な社会規範の浸透による、飲酒の害と利益に関するメッセージの混在が、アルコール消費をめぐる健康追及行動を遅らせている⁵⁾。そのため、アルコール問題は、生物と環境の相互関係を捉える生態学的モデルに基づいて、個人レベル、物理環境レベル、政策レベルなどマルチレベルの介入の組合せが必要とされる⁶⁾。

これまで、わが国でビンジ飲酒に関連した問題は、若年者によるいわゆるイッキ飲みや過量飲酒等による急性アルコール中毒を予防することを重視して取り組まれてきた。近年のわが国の調査では、ビンジ飲酒という消費パターンに注目し、大学生のビンジ飲酒とアルコール関連外傷との関連や、異常な飲酒

としての自己認識との関連、飲み放題システムといった環境レベルとの関連が明らかになっている^{7,8)}。そのような中で、本研究ではビンジ飲酒に対する個人のモチベーションに焦点をあてる。モチベーションは個人の内部・外部環境に影響を受ける意識で、生物と環境の相互関係を個人の意識から捉えることができる。また、ビンジ飲酒を習慣行動ではなくモチベーションから捉えるのはビンジ飲酒がアルコールの使用障害を増強し助長する行動のためである。精神医学的診断分類(DSM-5)による物質使用障害の診断⁹⁾では、コントロール障害、社会的障害、危険使用、身体依存という従来からの診断項目に、渴望(強い欲求, craving)という項目を新たに加えることによって、物質使用障害の嗜癖行動としての特徴¹⁰⁾の明確化を図っている。すなわち嗜癖行動とは、物質使用への渴望によってコントロール障害を来した状態であり、ビンジ飲酒の場合、初期には習慣行動と言いつてもいいが、習慣化しアルコール使用障害に移行するリスクが高い。したがって、ビンジ飲酒へのモチベーションの解明を通じて習慣化を防止するための早期介入が必要となる。

個人レベルでの健康行動のメカニズムの理解や、行動変容のための介入法のデザインに役立つ理論には「健康信念モデル」、「計画的行動理論(TPB)」、「合理的行動理論(TRA)」、「統合行動理論(IBM)」、「行動変容ステージモデル」がある⁶⁾。TPB, TRA, IBMはいずれも、個人のモチベーションに関連する構成概念に焦点を当てた理論である。この中で最初に提唱されたTRAは、行動を決定する主な要因は行動意図であり、行動意図は「態度」と「主観的規範」によって決定されると仮定している。一方、TPBは、行動意図の決定要因に「行動コントロール感」という新たな要因を加えたものである⁴⁾。さらに、IBMは、行動の決定要因として行

動意図の他に「知識とスキル」「環境的制約」「行動の重要性」「習慣」を追加し枠組みの拡張を図ろうとするものであるが、IBMを用いたビンジ飲酒の研究は蓄積が乏しい^{11, 12)}。

そこで本研究では、ビンジ飲酒についてTPBを用いた文献レビューを行う。また、国内文献がないため諸外国の文献をあたる。文献の検討に当たっては、TPB理論によるビンジ飲酒の検証方法や、構成概念の重み付け、介入効果の知見を扱うことにより、ビンジ飲酒へのモチベーションについての理解に加え、TPBやIBMを用いた研究の発展可能性についても検討を加える。

II. 方法

データ収集と分析方法

2019年9月までに発表された文献を対象に、検索エンジンは、EBISCO host (CINAHL complete, MEDLINE, PsycARTICLES, PsycINFO)を用いて検索した。その際、キーワードを“binge drinking” “the theory of planned behavior”, 除外キーワードに“adolescent”に設定し、2010年から2019年の10年間で、学術誌に限定して検索した。“adolescent”を除外した理由は、未成年の飲酒動機の構造が成人と異なるためである¹³⁾。結果20件が抽出された。このうち、重複論文や入手不可な論文、ビンジ飲酒の分析やTPBとしての因子を扱っていない論文、メタ分析を除外して、14件を抽出した。論文の選定プロセスは共同研究者と確認を取りながら行った。特に、論文中で扱っているTPBの構成概念や測定項目の妥当性については共同研究者と2人で検討を重ねた。抽出した論文は、研究デザイン別に発表年順で整理した。更にビンジ飲酒測定の構成概念、TPBの測定項目、ビンジ飲酒行動や行動意図に影響する因子と介入効果を整理した。分析では、検討した結果を整理し解釈するために文献統合¹⁴⁾を参考に論文の要約表を作成し概観を確認した。その上で、ビンジ飲酒の行動や行動意図への影響力と介入効果に着目し、一貫性や相違性を踏まえて整理し統合を図った。

III. 結果

対象論文の概要

対象論文は14件であった。分析結果をTable 1, Table 2に示す。研究デザインは、観察研究では横断研究3件¹⁵⁻¹⁷⁾、縦断研究8件¹⁸⁻²⁵⁾、介入研究は3件²⁶⁻²⁸⁾であった。調査対象は、大学生を対象としたものが12件、18歳以上の一般成人を対象としたものが3件であった。縦断研究におけるビンジ飲酒行動の検証期間は、2週間で4件と最も多く、次いで1か月が3件、1週間で1件、2か月が1件であった(重複を含む)。介入研究における効果検証期間は、1か月が3件と多く、次いで1週間で1件であった。

TPB測定因子の設定

TPBの各因子の測定には、主として以下の3種類があった。①行動意図、態度、主観的規範、行動コントロール感(Perceived Behavioral Control)の4因子で測定したものが4件^{17, 20, 21, 29)} ②行動意図、態度、主観的規範、行動コントロール感、セルフエフィカシーの5因子で測定したものが3件^{18, 19, 22)}、行動意図、感覚的態度、認知的態度、主観的規範、状況的規範、セルフエフィカシー、行動コントロール感の7因子で測定したものが2件^{27, 28)}であった。なお、これらの測定項の中には、尺度を組合せているものもあったが、主として4種類のTPB測定項目^{27, 30-32)}が使用されていた。

ビンジ飲酒に対するTPB各因子の影響力の検討

1. ビンジ飲酒行動への影響

TPB理論を用いて、縦断研究により検証した調査は7件(Table 1)で、ビンジ飲酒行動への説明力は29.3-77.0%であった。ビンジ飲酒行動に最も強く影響を与えていたのはTPBで「行動意図」^{19, 20, 22, 25)}、TPB以外では「過去のビンジ飲酒」^{24, 26)}であった。また、ビンジ飲酒に影響を与えていたのは、「主観的規範」^{18, 22)}や「行動コントロール感」^{18, 25)}「習慣」^{19, 20)}であった。

2. ビンジ飲酒の行動意図への影響

TPBを用いて、横断・縦断研究によりビンジ飲酒の行動意図を検証した調査は9件(Table 1)で、ビンジ飲酒行動意図への説明力は47.0-80.0%であっ

Table 1 横断・縦断研究の概要

文献	調査法	調査対象	調査国	sample	研究目的	意思の影響因子 (β)	行動意図 (調整済み R2)	行動の影響因子 (β)	行動 (調整済み R2)
Deshpande et al. 2011	横断研究	大学	USA	294	Binge 飲酒の状況を区分し、各影響要因を検証	Light binge drinker 態度 行動コントロール感 Medium binge drinker 態度 主観的規範 Heavy binge drinker 態度			
Rhodeset et al. 2013	横断研究	大学生	GBR	149	飲酒意思と多次元の行動コントロール感がビンジ飲酒に及ぼす影響について検証			TPB 自己効力感 (.64***) 行動意図×罪悪感 (.07**) 罪悪感 (.16**)	48.0%
Haydon et al. 2018	横断研究	18歳以上の女性	AUT	1069	TPBと自己同一性について、女性のBinge飲酒行動意図との関連を検証	18-24歳 (一例) TPB 態度 (.343***) 主観的規範 (.146***) (年代によっては有意でなかった) 行動コントロール感 (-.142***) 自己同一性 (.354***)	年代別 48.62%		
Woolfson et al. 2010	縦断研究	大学生	SCO	T1= 64 T2= 62 (1か月後)	TPBモデルがBinge飲酒の行動意図や行動を予測するかを検証	TPB 態度 (.43***) 過去の行動 (.35**) 態度×過去の飲酒行動 (.29**) 自己効力感 (.017*)	80.0%	TPB 認知された制御 (-1.42) 主観的規範 (-1.21*)	Nagelkerke R2 65%
Norman 2011	縦断研究	大学生 (18歳以上)	GBR	T1= 137 T2= 109 (1か月後)	TPBと習慣力がBinge飲酒行動に与える影響を検証	TPB 態度 (.56***) 自己効力感 (.27***) 習慣力 (.24***)	78.0%	TPB 行動意図 (.45**) 習慣力 (.31**)	42.0%
Gardner et al. 2012	縦断研究	大学生	GBR	T1= 167 T2= 128 (1週間後)	習慣と同一性の概念が、TPB拡張モデルとして適切であるかを検証	TPB 態度 (.47***) 行動コントロール感 (.16*) 同一性 (.33***)	62.0%	TPB 行動意図 (.45***) 習慣 (.20*)	40.0%
Hagger et al. 2012	縦断研究	会社員 (35歳以下)	EST FIN SWE GBR	n=486 T1= baseline T2= 1か月後 T3= 2か月後	自己決定理論から動機付けの理論の順序を検証	TPB 態度 (.49*) (.57**) 行動コントロール感 (.28**) (.16**) 主観的規範 (.06*) (.08*) 過去の飲酒問題 (-.13*) (-.11*)	(T1-T2) 69% (T2-T3) 66%	過去のBinge飲酒 (.36**) (.43**) 過去の飲酒問題 (.13*)	(T1-T2) 31.44% (T2-T3) 29.27%
Ross et al. 2013	縦断研究	大学生 (18歳以上)	AUS	T1= 161 T2= 142 (2週間後) T1/T2完了=-91	TPBと自己効力感および社会的促進がBinge飲酒に及ぼす影響について検証	TPB 態度 (.43**) 主観的規範 (.40**) 社会的促進 (.21**)	53.0%	TPB 行動意図 (.79**) 主観的規範 (.22**)	77.0%
Chen et al. 2015	縦断研究	大学生	USA	T1= 279 T2= 279 (2週間後)	Binge飲酒の予測因子としてTPBやストレス対処、孤独の影響を検証			民族 TPB 態度 ストレス	
Case et al. 2016	縦断研究	18歳以上	GBR	T1= 197 T2= 179 (2週間後)	TPB理論と連動して、同一性の適切さがBinge飲酒行動意図を予測するかを検証	TPB 態度 (.25**) 行動コントロール感 (-.15**) 道徳的規範 (.33**) 同一性の適切さ (.21*) 過去のBinge飲酒 (.17**)	71.6%	TPB 行動意図 (.24*) 過去のBinge飲酒 (.60**)	60.1%
Gabbiadini et al. 2017	縦断研究	大学生	ITA	T1= 404 T2= 404 (2週間後)	計画的行動理論を越えて、MGB (model of goal-directed behavior) がBinge飲酒にどれだけ影響するかを検証	TPB 態度 (.54***) グループ規範 (.19***)	47.0%	TPB 行動意図 (.57***) 行動コントロール感 (-.17***)	37.0%

Table 2 介入研究の概要

著者 出版年	調査方法	調査対象	調査国	sample	研究目的	介入内容	ビンジ飲酒 介入効果	TPB測定項目	備考
Hagger et al. 2012	介入研究	大学生	GBR EST FIN	T1=718 (baseline) T2= 467 (1か月後)	・実行意図と精神的シミュレーション効果の検証	①実施意図 ②精神的シミュレーション	①効果あり ②効果なし	行動意図 態度 主観的規範 認知された制御	実施意図による介入効果は英国のみ認められる
Norman et al. 2018	介入研究	大学 新入生	GBR	T1= 2,682 (baseline) T2= 1,389 (1か月後) T3= 892 (6か月後)	・TPB理論からの目標信念 メッセージの効果 ・実行意図の立案効果 ・防衛的処理を減らす自己肯定化の効果	①信念メッセージ ②実施意図 ③自己肯定化	①効果あり ②効果なし ③効果なし	行動意図 感情態度 認知的態度 主観的規範 状況的規範 自己効力感 認知された制御	
Norman et al. 2019	介入研究	大学 新入生	GBR	T1=493 (baseline) T2=407 (1週間後) T3=205 (1か月後)	・TPB理論からの目標信念メッセージの効果 ・実行意図の立案効果	①信念メッセージ ②実施意図	①効果なし ②効果なし ①×②効果なし	行動意図 感情態度 認知的態度 主観的規範 記述的な規範 自己効力感 制御された認知	per protocol analysisにより、実施意図に介入効果が認められる

た。行動意図に最も強く影響を与えていたのは、TPBで「態度」^{18-22, 25)}、「道徳的規範」²⁴⁾、TPB以外では「自己同一性」¹⁷⁾、であった。態度の測定については「良い-悪い」「賢い-愚かな」といった行動の結果評価や判定的態度、「楽しい-楽しくない」といった行動についての全体的感情が使われていた。TPB以外の項目では、ビンジ飲酒の行動意図に「同一性」^{17, 20, 24)}、「習慣力」¹⁹⁾、「社会的促進」²²⁾、「過去の飲酒問題」²⁴⁾、「過去のビンジ飲酒」²⁴⁾、「グループ規範」²⁵⁾、が影響していた。

介入効果の検討

1. 実施意図と信念メッセージによる検証

TPBを用いたビンジ飲酒の介入プログラムで〈実施意図〉とは〈信念メッセージ〉による介入が実施されていた²⁶⁻²⁸⁾。〈実施意図〉は、危機的な状況(計画の「if」の部分)を特定し、それを適切な行動反応(計画の「then」の部分)に結びつけ、目標意図を行動に移すことを助ける計画を立てるものである⁶⁾。今回の介入研究ではビンジ飲酒に関する「if then」を各自で3つ構成するように設定していた。また、〈信念メッセージ〉による介入とは、それぞれの行動や集団の重要な構成概念について、その下位概念である信念に重点を置いて介入するものである⁶⁾。2つの調査^{27, 28)}では、先行研究³³⁾に基づいてビンジ飲酒介入のために3つの信念「行動信念」「規範信念」「統制信念」から特定した「ビンジ飲酒なしで大学を楽しむことができる」「ビンジ飲酒は学業に良くない」「ビンジ飲酒に対する社会的圧力に抵抗すること」に着目した簡易ビデオメッセージ(各1分)を作成して使用していた。

〈実施意図〉によるビンジ飲酒行動の介入効果は認められず²⁷⁾、Per Protocol Analysisでのみ効果が認められていた²⁸⁾。また、一部の国に限定してその効果が認められていた²¹⁾。〈信念メッセージ〉によるビンジ飲酒行動の介入効果は、一貫した効果は認められなかった^{27, 28)}。〈実施意図〉と〈信念メッセージ〉の相乗効果は認められなかった^{27, 28)}。

2. その他の介入検証

その他の介入について、〈精神的シミュレーション^{26, 27)}、〈自己肯定化²⁶⁾〉が行われていた。〈精神

的シミュレーション〉は、シミュレーション台本³⁴⁾を導入し、望ましい飲酒結果に関する介入が実施され、〈自己肯定化〉では尺度を使用した介入が実施されたが、いずれも介入効果はなかった。

IV. 考 察

対象論文の概要

TPBを用いて行われたビンジ飲酒に関する研究では、対象が大学生であるものが主流であった。また、今回の対象論文には性差に焦点をあてて分析した研究がなかった。ビンジ飲酒者は若者に多く³⁵⁾、特に英国では大学生のビンジ飲酒が深刻な問題となっている³⁶⁾。そのため、行動変容理論のTPBを用いたビンジ飲酒に関する研究は大学生を主流に行われていたと言えるだろう。また縦断研究や介入研究では、大学生を対象とした方が統制しやすいというメリットもある。しかし、TPBの構成概念は、その重みづけが行動や集団によって特徴づけられる⁶⁾。就労や育児、介護などの多様な社会的ストレスが飲酒行動に及ぼす影響を考えると、社会人のビンジ飲酒の行動変容の特性は大学生とは異なる可能性もある。今後は、大学生以外の一般成人を対象とした研究成果が蓄積されることが望まれる。また、ビンジ飲酒の性差は、例えば女性の多量飲酒の背景に男女平等の意識が含まれている事³⁵⁾の影響も想定される。今後は性別や性差を意識したTPBによる分析も必要と考えられる。

TPB 測定因子の設定

TPB各因子の測定には、主として4種類が用いられていた^{27, 30-32)}。これらの中には個人的能力について「行動コントロール感」と「自己効力感」の2つの概念で測定されているものがあった。「行動コントロール感」は、その行動を実施する上で様々な要因がどれほど容易/困難にするかについてその人の認識で決まること、「自己効力感」は、様々な障害や困難に直面しながらもその行動を実行する自信の程度を表す概念で、双方を含めることは有用である⁶⁾。IBMの構成概念である「個人的能力」は、TPBの構成概念である「行動コントロール感」に「自己効力感」を加えたものである⁶⁾。現在のビンジ飲

酒に関する TPB 研究では、IBM の構成概念が一部使用されている状況にあることがわかる。

ビンジ飲酒に対する TPB 各因子の影響力の検討

1. ビンジ飲酒行動への影響

TPB を用いて行われた縦断研究（7 件）では、ビンジ飲酒行動に最も強く影響を与えていたのは「行動意図」で、その説明力は 29.3-77.0% であった。「行動意図」が行動に強く影響していた事は、モデルが示す通りのプロセスであったと言える。また、一般的に TPB は行動意図の分散の 39%、行動の分散の 27% を占める³⁴⁾。今回の対象論文には、TPB 以外の変数について検証を行った調査報告が含まれるため、一概には言えないがビンジ飲酒行動への説明力は高い傾向にあった。これに関しては、ビンジ飲酒者には一定の割合でアルコール使用障害に該当する対象者が含まれているためではないかと考える。

一方で、ビンジ飲酒に影響を及ぼす変数として、TPB には含まれないが IBM には含まれている「過去のビンジ飲酒」「過去の問題飲酒」「習慣」が見出された。これらの変数による影響は、飲酒と習慣行動の密接な関連によると考えられ、今後、IBM を用いたビンジ飲酒の調査結果を対策につないでいくためには、習慣行動への着目することが重要となる。

2. ビンジ飲酒の行動意図への影響

TPB を用いて行われた横断・縦断研究（9 件）では、ビンジ飲酒の行動意図に最も強く影響を与えていたのは「態度（6 件）」「道徳的規範（1 件）」で、その説明力は 47.0-80.0% であった。今回の結果から、ビンジ飲酒に対する行動変容を検討する上で、最も注力すべき構成概念は「態度」であったと言える。また、態度の測定には、行動の結果評価、判定的態度と行動の全体的感情が使われていた。結果評価は TPB の構成概念であり、判定的態度や行動についての全体的感情は IBM の構成概念である。IBM の構成概念を用いた態度の結果^{27, 28)}からは、行動の全体的感情の平均値が中央値もしくは若干ポジティブな傾向を示し、判定的態度の平均値はネガティブな傾向を示していた。この事から、ビンジ飲酒者の行動変容に向けては、ビンジ飲酒の快-不快の両方の感情を認識できることが重要と言える。

また、道徳的規範²⁴⁾は、「英国の殆どの人はビンジ飲酒することを認めるだろう」といった主観的規範の推奨的規範に属する設問であった。飲酒に関する主観的規範は文化によっても異なる。日本は飲むこと酔うことに寛容な文化をもつ³⁷⁾。このような文化が、わが国のビンジ飲酒に対する主観的規範にどのように影響するかは確認が必要である。また、ビンジ飲酒に対して人が感じる社会的圧力には主観的規範以外にも IBM で規定された「環境的制約」にも影響する。今後は、わが国において、社会的圧力を価値や期待とする「主観的規範」と行動環境としての「環境的制約」の両方から捉える IBM での検討が必要になると考える。

3. 介入効果の検討

TPB を用いたビンジ飲酒の介入プログラムでは、主として〈実施意図〉や〈信念メッセージ〉が実施されていた。また、〈実施意図〉の効果は部分的にしか認められなかった。〈実施意図〉は条件に特化された「行動意図」であるため、一般的な「行動意図」よりも強い介入効果が期待できる³⁸⁾。しかし、今回の調査研究による介入手法では、ビンジ飲酒の行動に至る 3 つの場面を Web 上で一度記載してもらうにとどまっていた。この手法では記憶の定着に課題を残す可能性が考えられる。今後の介入検討では、立案した実施意図を反復提示するなどして、その効果を検証することも必要と考えられる。また、〈信念メッセージ〉の効果についても、ビンジ飲酒行動の変容には一貫した見解が得られなかった。今回の介入手法は 3 分程度の動画教材にとどまったため、教育時間の再検討も必要と考えられる。更に、〈実行意図〉〈信念メッセージ〉の介入検証は、大学生に限定され、かつ論文数が少なかった。今後、対象者層を広げ、対象者に応じた介入方法を検討しながら更なる検証を重ねていく事が重要と考えられた。

研究の意義と限界

本研究の意義は、ビンジ飲酒についての TPB の知見を整理し、その特徴を明らかにできたことにある。一方で、研究限界は分析対象とした論文について信頼性の検証が出来ていない事があげられる。

V. 結論

本研究では、TPBを用いたビンジ飲酒に関する文献レビューを行った。TPBの測定は、近年ではIBMの構成概念を取り入れた項目が使用されていた。また、TPBの構成概念でビンジ飲酒行動に最も強く影響していたのは「行動意図」、ビンジ飲酒行動意図に最も強く影響していたのは「態度」であった。このことから、ビンジ飲酒対策の検討に「態度」を注視する必要性が示唆された。また、TPB以外の項目では、ビンジ飲酒行動に「習慣」「過去のビンジ飲酒」「過去の問題飲酒」が影響しており、これまでの習慣の強度を重視する必要性も明らかとなった。更に、介入研究では、大学生を対象に「実施意図」や「信念メッセージ」による介入が行われていたが、部分的な効果にとどまっていた。

本研究の一部は、第81回日本公衆衛生学会総会で発表した。また、本研究はJSPS科研費 JP22K10928の助成を受けたものである。

「利益相反自己申告：申告すべきものなし」

文献

- 1) National Institute on Alcohol Abuse and Alcoholism: Health Topics Binge Drinking , <https://www.niaaa.nih.gov/alcohols-effects-health/alcohol-topics/health-topics-binge-drinking>, August 20, 2022
- 2) 尾崎米, 金城文:【アルコール医学・医療の最前線 2020 UPDATE】アルコールの基礎医学 アルコールの疫学 わが国の飲酒行動の実態とアルコール関連問題による社会的損失のインパクト, 医学のあゆみ, 274 : 34-39, 2020
- 3) 小松知己, 吉本尚 監訳・監修: BRIEF INTERVENTION For Hazardous and Harmful Drinking A Manual for Use in Primary Care 危険・有害な飲酒への簡易介入: プライマリケアにおける使用マニュアル, https://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/67210/WHO_MS_D_MSB_01.6b_jpn.pdf;sequence February 22, 2023
- 4) アルコール健康障害対策基本法ネットワーク: 非感染性疾患 (NCDS) の予防と管理に関する第3回国連総会ハイレベル会合の政治宣言, <https://alhonet.jp/pdf/WHO%20Action%20Plan%202022-2030.pdf>; sequence February 22, 2023
- 5) Armitage CJ, Conner M: Efficacy of the Theory of Planned Behaviour: a meta-analytic review, *British Journal of Social Psychology*, 40: 471-499, 2001
- 6) Glanz K, Rimer BK, Viswanath, K: *Health Behavior: Theory, Reserch, and Practice*.USA: John Wiley, 2015 (木原雅子・加治正行・木原正博 訳: 健康行動学 その理論, 研究, 実践の最新動向, 87-99, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 東京, 2018)
- 7) Kawaida K, Yoshimoto H, Goto R, Saito G, Ogai Y, Morita N, Saito T: The Use of All-You-Can-Drink System, "Nomihodai", Is Associated with the Increased Alcohol Consumption among College Students: A Cross-Sectional Study in Japan, *The Tohoku Journal of Experimental Medicine*, 245: 263-267, 2018
- 8) 吉本尚: 大学生の危険な飲酒における現状, 危険な飲酒とアルコール関連外傷との関係および飲酒量の自己認識との関係, 筑波大学人間総合科学研究科学位論文, 2017
- 9) 清島恵, 古賀聡: アルコール使用障害の疾患概念の変遷とロールシャッハ・テスト研究, 九州大学心理学研究, 17 : 53-61, 2016
- 10) Hyman S, Malenka R: Hyman SE, Malenka RC. Addiction and the brain: the neurobiology of compulsion and its persistence. *Nat Rev Neurosci* 2: 695-703, *Nature reviews Neuroscience*. 2: 695-703, 2001
- 11) Braun R, Glassman T, Sheu J-J, Dake J, Jordan T, Yingling F: Using the Integrated Behavioral Model to Predict High-Risk Drinking among College Students, 2012
- 12) Gutema H, Debela Y, Walle B, Reba K, Shibabaw T, Disasa T: Predicting binge drinking among university students:

- Application of integrated behavioral model, *PLoS One*, 16: e0254185, 2021
- 13) Kloep M, Hendry LB, Ingebrigtsen JE, Glendinning A, Espnes GA: Young people in 'drinking' societies? Norwegian, Scottish and Swedish adolescents' perceptions of alcohol use, *Health Education Research*, 16: 279-291, 2001
 - 14) 大木秀一：文献レビューのきほん 看護研究・看護実践の質を高める, 61-86, 医歯薬出版, 東京, 2013
 - 15) Deshpande S, Rundle-Thiele S: Segmenting and Targeting American University Students to Promote Responsible Alcohol Use: A Case for Applying Social Marketing Principles, *Health Marketing Quarterly*, 28: 287-303, 2011
 - 16) Rhodes TN, Clinkinbeard SS: College students and binge drinking: Exploring the relationship between control and intention on behavior, *Applied Psychology in Criminal Justice*, 9: 24-44, 2013
 - 17) Haydon HM, Obst PL, Lewis I: Examining women's alcohol consumption: The theory of planned behavior and self-identity, *Substance Use & Misuse*, 53: 128-136, 2018
 - 18) Woolfson LM, Maguire L: Binge drinking in a sample of Scottish undergraduate students, *Journal of Youth Studies*, 13: 647-659, 2010
 - 19) Norman P: The theory of planned behavior and binge drinking among undergraduate students: Assessing the impact of habit strength, *Addictive Behaviors*, 36: 502-507, 2011
 - 20) Gardner B, de Bruijn GJ, Lally P: Habit, identity, and repetitive action: A prospective study of binge-drinking in UK students, *British Journal of Health Psychology*, 17: 565-581, 2012
 - 21) Hagger MS, Lonsdale AJ, Hein V, Koka AL, Lintunen T, Pasi H, Lindwall M, Rudolfsson L, Chatzisarantis NLD: Predicting alcohol consumption and binge drinking in company employees: An application of planned behaviour and self-determination theories, *British Journal of Health Psychology*, 17: 379-407, 2012
 - 22) Ross A, Jackson M: Investigating the theory of planned behaviour's application to binge drinking among university students, *Journal of Substance Use*, 18: 184-195, 2013
 - 23) Chen Y, Feeley TH: Predicting binge drinking in college students: Rational beliefs, stress, or loneliness? *Journal of Drug Education*, 45: 133-155, 2015
 - 24) Case P, Sparks P, Pavey L: Identity appropriateness and the structure of the theory of planned behaviour, *British Journal of Social Psychology*, 55: 109-125, 2016
 - 25) Gabbiadini A, Cristini F, Scacchi L, Monaci MG: Testing the model of goal-directed behavior for predicting binge drinking among young people, *Substance Use & Misuse*, 52: 493-506, 2017
 - 26) Hagger M, Lonsdale A, Koka A, Hein V, Pasi H, Lintunen T, Chatzisarantis N: An Intervention to Reduce Alcohol Consumption in Undergraduate Students Using Implementation Intentions and Mental Simulations: A Cross-National Study, *International Journal of Behavioral Medicine*, 19: 82-96, 2012
 - 27) Norman P, Cameron D, Epton T, Webb TL, Harris PR, Millings A, Sheeran P: A randomized controlled trial of a brief online intervention to reduce alcohol consumption in new university students: Combining self-affirmation, theory of planned behaviour messages, and implementation intentions, *British Journal of Health Psychology*, 23: 108-127, 2018
 - 28) Norman P, Webb TL, Millings A: Using the theory of planned behaviour and implementation intentions to reduce binge drinking in new university students, *Psychology & Health*, 34: 478-496, 2019
 - 29) Chen Y, Feeley TH: Predicting binge drinking

- in college students: Rational beliefs, stress, or loneliness?, *Journal of Drug Education*, 45: 133-155, 2015
- 30) Ajzen I: Constructing a Theory of Planned Behavior Questionnaire (2006), https://www.researchgate.net/publication/235913732_Constructing_a_Theory_of_Planned_Behavior_Questionnaire, August 20, 2022
- 31) Johnston KL, White KM: Binge-Drinking: A Test of the Role of Group Norms in the Theory of Planned Behaviour, *Psychology & Health*, 18: 63-77, 2003
- 32) Norman P, Conner M: The theory of planned behaviour and binge drinking: Assessing the moderating role of past behaviour within the theory of planned behaviour, *British Journal of Health Psychology*, 11: 55-70, 2006
- 33) Epton T, Norman P, Harris P, Webb T, Snowsill FA, Sheeran P: Development of theory-based health messages: three-phase programme of formative research, *Health Promotion International*, 30: 756-768, 2015
- 34) Pham LB, Taylor SE: From thought to action: Effects of process- versus outcome- based mental simulations on performance, *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25: 250-260, 1999
- 35) Wilsnack RW, Wilsnack SC, Gmel G, Kantor LW: Gender Differences in Binge Drinking: Prevalence, Predictors, and Consequences, *Alcohol Research: Current Reviews*, 39: 57-76, 2018
- 36) Norman P, Conner MT, Stride CB: Reasons for binge drinking among undergraduate students: An application of behavioural reasoning theory, *British Journal of Health Psychology*, 17: 682-698, 2012
- 37) 清水新：酒飲みの社会学 酔っぱらいから日本が見える，新潮社，東京，2002
- 38) Webb TL, Sheeran P: Does changing behavioral intentions engender behavior change? A meta-analysis of the experimental evidence, *Psychological Bulletin Journal*, 132: 249-268, 2006